

事業完了報告書（横浜市教育委員会）

調査研究期間等

調査研究期間	令和6年6月4日 ～ 令和7年3月6日
調査研究事項	《委託研究：夜間中学における教育活動充実に係る調査研究》 I. 教育課程、教育環境整備に関すること ③ 中学校教育を実施するに必要な日本語指導の在り方
調査研究のねらい	本市では、令和6年2月時点で外国人人口が約11万7千人で全国市区町村では大阪市に次いで2番目の規模である。 本市蒔田中学校夜間学級においても、生徒の国籍は6か国に及び、外国につながる生徒も含めると、生徒の約7割が日本語指導の必要な状況である。国語・数学・英語の習熟度や、音楽や体育などの科目における事前の知識等にも差異があるため、課題別学習の時間を設け、個人の課題に応じた学習を行うことなどにより、日本語を含めた基礎学力の一層の充実に取り組んでいる。 さらに、本市教育委員会が運営する日本語支援拠点施設「ひまわり」や日本語教室などと連携することで、日本語初期指導を始めとした、教科学習に必要な学習言語の指導や、日本で生活するうえで必要な情報の提供等をしている。本市の生徒の現状に適した教育課程及び効果的な学習指導の実践に繋げる等、きめ細かな指導体制の構築及び教室等の教育環境整備など、更なる教育活動の充実を図ることをねらいとして本調査研究を実施する。 本市夜間学級の周知拡大に向けて、案内チラシの多言語版の作成等を実施している。また、入級要件の記載方法の変更等に伴い、入級に対する問い合わせも増えている状況である。今後も、事業を進めていく中で、夜間学級を必要とする市民等に確実に周知できるようにその方法を検討していく。
調査研究の成果	【横浜市・横浜市立蒔田中学校】 常に変化する社会状況とともに、生徒の学びのニーズが多様化しており、生徒の現状に適した教育課程及び効果的な学習指導の実践に繋げ、更なる教育活動の充実を図るために、次の内容について調査研究を行う。また、今後の夜間学級の更なる充実のためにも、本市における夜間学級の中長期的なビジョンを策定し、年度末に研究紀要を作成し、一年間の研究の成果をまとめ、次年度以降の実践に繋げていく。 1 本市における夜間学級の実施 2 習熟度別少人数授業の在り方について

	3 日本語補助教材の選定について 4 学習支援サポーター（通訳支援スタッフ）を活用した教育活動の在り方について 5 横浜市日本語教室（集中教室）や日本語支援拠点施設等（ひまわり）との連携による成果と課題について 6 ICT機器の活用について 7 日本語能力試験（JLPT）取得を目指した指導の在り方について 8 効果的な漢字学習の在り方について 9 日本語習得を目指した読書活動の在り方について ○学級担任・生徒との教育相談の重要性（随時） ・一人ひとりの生徒の現状をこまめに把握することで、自己実現に向けた手立てを検討する。 【成果】毎日の始業前、始業後の打合せにおいて、職員一人ひとりが感じたことを報告し合い、共有し、手立てを入念に検討することができた。その結果、生徒へのアプローチを考慮して、具体的な手立てを示すことができた。 ○補助教材の選定（随時） ・日本語支援拠点施設等との連携により、生徒の学力、日本語の習熟度等に応じた補助教材を使用することで効果的な学習方法を検証する。 【成果】日本語教室との連携を図ることによって、相互に生徒の現段階の日本語能力を把握すると共に、どのような課題があり、そのためにどのような目標をもって取り組むべきかを確認することができた。その背景から、前向きに取り組む姿勢が多くみられ、日本語の習熟度の成果もあがった。 ○夜間学級担当者会の実施（通年） ・毎月、専任教諭、教科担当非常勤講師、学習支援サポーター（支援スタッフ）、養護教諭等担当者全員の参加する担当者会を実施し、多角的な視野で習熟度別少人数授業のより良い在り方を検討する。 ・学習支援サポーターによる支援の方法について、効果的な支援
--	---

	方法の検討 ・各教科担当における日本語指導方法の確認 ・国語の教科学習や課題別学習の時間における進学や就職にも有効な日本語能力試験（JLPT）取得を目指した指導の在り方 ・課題別学習の時間における効果的な漢字学習、及びICT教材を活用した日本語習得を目指した読書活動の在り方について ・日本語支援拠点施設教員や多文化共生NPO法人講師等を招いた研修会を年3回程度実施し、担当者の知識や意識を高め生徒指導に還元する。 【成果】課題別学習の時間における国語学習において、外国と繋がる生徒の日本語力はあがっている。またICTを活用した授業のおかげで、生徒の前向きな活動を誘発して、さらなる学習効果を生んでいる。その支援として各教科の非常勤講師や学習支援サポーターのおかげで、学びの充実を図ることができている。夜間学級教職員向けの講師を積極的に呼ぶことにより、現在どのような視点で物事を見ていなければならないかや現場でのあるべき姿を習得することができている。教職員も日々勉強している環境ができている。 ○ICT機器の活用（通年） ・映像や画像等、視覚に訴える授業展開の構築。 ・学習進度や理解度に差がある生徒に対する学習支援。 【成果】幅広い年齢層や外国と繋がる生徒が大半を占める夜間学級では、個別最適な学習が必要不可欠である。学習支援サポーターが入り授業を支えている。さらにICTを活用することによって個別の学習が可能となり、生徒がより前向きに取り組む活動が可能となった。 ○日本文化等に特化した行事の実施（通年） ・遠足（小田原等）、芸術鑑賞（訪問コンサート等）、防災ワークショップ（消防、災害時のスマートフォンの扱い方等） ・日本文化、日本における社会生活などの効果的な体験活動を実施することで、日本で生活するうえで必要な情報の提供を図る。 【成果】遠足については、事前学習でクロムブックを通して行い、伝統的な食文化を学び堪能し、お城の見学から日本の歴史を感じる。
--	--

じることができた。芸術館鑑賞では、様々な楽器の演奏を聴き、その音色を味わうとともに、実際に演奏に合わせて合唱をしたり、楽器に触れさせてもらい、音楽の奥深さを感じることができた。防災学習では、日本語が堪能でなくとも不慮の事故や災害時にとるべき手法を学ぶことができた。

○キャリア教育の実施（7月）

- ・卒級した生徒を招き、卒級後の社会生活、キャリアについて語ってもらうことで、生徒が自己のキャリアを考える機会を持つ。

【成果】卒業後の進路を考えるきっかけとなった。実際に外国から日本に来た卒業生の話を聞き、自らと同じ境遇の中でどのように生きているか、どのようなことを乗り越えて今があるかを学ぶことができた。自らの不安を拭うために、講演会後には質問をする生徒が数多くいた。

○高校進学希望者への日本語教室面接練習会への参加（12-1月）

- ・生徒の進路に寄り添った支援を実施する。

【成果】高校進学には、日本語を母国語としていない生徒にとっては、多くの壁が立ちはだかっている。試験問題を読み解くことから始まるが、面接試験もあるので正確に日本語を理解しなければならない。その受け答えについても、日本語の形を習得することもさらに難しいこととなる。練習会では、日本語支援拠点校で実施されることもあり、生徒の境遇を理解してくださる境遇の方が関わることは非常に意義のあることである。

○研究紀要の発行、配付（2・3月）

- ・生徒の文集の部分で、この1年間の日本語能力の向上、一人ひとりの頑張りや思いを確認する。

【成果】研究紀要の発行については、夜間では欠かせないものとなっている。1年間の記録とともに日本語習得の成果を形にするものである。この1年間の積み重ね連続が3年生となり、立派な文章表現になるので、日本語力向上のために生徒、教職員がひとつの目標にしているものである。

○夜間学級入級説明会、プレオープンスクールの実施（2・3月）

- ・夜間学級紹介（授業、行事、学校生活、持ち物等）、入級予定

	者の日本語能力の確認をし、実際に日本の学校生活を体験してもらうことで、入学後の学校生活をより円滑に行う。 【成果】夜間学級という存在は、現在認知がまだまだ低いことが伺われる。十分な教育を受けられなかった学び直しの生徒や外国から来日した生徒など、その層は幅広いからこそ、通訳を用いた丁寧な入級説明会やプレオープンスクールは必須になる。学齢期を超えた生徒たちが集まるため、貴重な時間ともなる。生徒が安心して入級できる会となっているが現状である。 ○夜間学級入級案内の多言語版（日本語、英語、中国語、タガログ語、ネパール語）を作成し、配付（通年）した。 ○神奈川県夜間学級設置校連絡会（年２回）、県下夜間学級設置校の合同研修会（年１回） ・教育活動の円滑な推進に向けた協議を行う（６月、３月） ・３校合同研修会の実施（７月） 【成果】 ・年度当初の連絡会では、運営方法、年間活動の計画検討、確認を実施する。７月の３校合同研修会の実施校（輪番制）、目的、ねらい、情報交換会の内容検討を行う。また、現在の教育活動の情報共有、今後の取組を伝えあう。 ・合同研修会では、３校の全職員が集まり開催をする。各校の紹介、テーマを絞った質疑応答を行い、共有を図る。情報交換では、小グループに分かれてその時のテーマに沿って各校の実践や今後の展望を発表し合い、共有をはかる。
--	---